

W36b **MAXI/SSC のキャリブレーションの現状**

北山博基, 常深博, 木村公 (大阪大学), 富田洋, 松岡勝, 上野史郎, 片山晴善 (JAXA), 大休寺新 (宮崎大学), ほか MAXI チーム

国際宇宙ステーション (ISS) に搭載された X 線全天監視装置 MAXI は、2009 年 8 月に観測を開始した。MAXI/SSC は 32 個の CCD を搭載しており、0.5~12keV のエネルギー帯域を全天モニターしている。MAXI/SSC は CCD を用いて初めて全天観測を行っている。MAXI/SSC ではキャリブレーションとして、コリメータ由来の Cu-K、端の CCD の上にのせている ^{55}Fe からの Mn-K、がある。ISS の姿勢や太陽角により CCD 温度は -70 ~ -57 °C、プリアンプは -22 ~ -7 °C、SSCE(The SSC Electronics) は 44 ~ 59 °C の間を変動していて、それらの温度変化にともないキャリブレーションである Cu-K α のエネルギーは約数十 eV ずれることが分かった。そこで、Cu-K α の PHA の温度依存性を詳細に解析して較正を進めた。また、放射線により CCD の電荷転送効率が時間とともに悪くなっており、それに対する較正も行った。今回は、温度依存性ととも時間依存性も考慮したキャリブレーションの現状について報告する。